

ジパング 日本国
—— マルコ・ポーロの東方 (4) ——

高 田 英 樹

Cipangu Ri-ben-guo
— Orient of Marco Polo (4) —

Hideki Takata

キーワード

マルコ・ポーロ、ジパング、ルスティケッロ・ダ・ピーサ

はじめに

その記事は、帰路の部最初の「インディエ海の船」の章 (Ch.159) の後、インドへ向かう前にさらに東の大洋上にある島のことを語っておこうとして、3章にわたってある。始めの2章は日本では元寇として知られるその遠征のことで、泉州からの出帆と大風による難破の前半 (Ch.160) と、島に取り残された兵たちのその後の顛末を語る後半 (Ch.161) とに分かれる。最後の1章 (Ch.162) は、カタイ・マンジとも共通する偶像および偶像崇拜者についてのまとめと、その地域の海 (チン海) の説明からなる。これらは、日本の存在を明確にヨーロッパに知らせた最初となるとともに、後に世界史をも動かすものとなったことは周知であろう。が、そのテキストは内容の正と誤、情報の精と粗と合わせて、FとZ・Rの異同といういつまながらの問題を抱える¹。(F・Zの現写本からの転記とRの原文およびそれらの和訳は、Ch.160については前稿に掲げたので省略する²。太字は、三版相互の異なり部分を示す。)

1. Ch.160 : ジパング遠征 (前半)

「ジパングは東の方の島で、陸から沖合いに1,500マイル離れている。とても大きい島である。人々は色白く、礼儀よく、美しい。偶像崇拜で、独立しており、自分たち自身の以外に他の誰の支配ももたない」(F) と始まる。「1,500マイル」(約2,400km) は、泉州から九州までの直線距離にほぼ相当する。「礼儀よく」は、礼節の国という唐宋以来の日本観を反映したものであろう。『元史』にも「日本は素より礼を知るの国と号す」とある³。もっともすぐ続いて、「その国と上下の分未だ定まらず、礼数の言うべきものなし」とあるが。他の情報もさほど外れていない。ところが、それに続く話は誇大なものであった。

*たかた ひでき：大阪国際大学人間科学部非常勤講師 (2010.12.10受理)

島には莫大な金がある。F「君主の宮殿は屋根が純金で葺かれ、数多ある部屋の床（R:天井）も全て指二本よりも分厚い黄金が敷かれ、広間や窓も金で飾られている」。金の話は全編欠くことなく多いが、確かにここジパングの黄金が際立つ。黄金島ジパング伝説の成立である。貿易で決済に使われる金銀や留学僧たちが携えてくる豊富な生活資金、また佐渡の金山や平泉の金色堂⁴、等に起因する産金国日本のイメージに基づいたものとされるが、その上に現実に建物のこと、とりわけ城郭の金色に輝く鬼瓦や飾り瓦、部屋に敷き詰められた金糸の畳の縁、金箔や金銀の襖・屏風や蒔絵のことが、現地の人々の間では誤ってあるいは冗談めかして大仰に噂されていたのであろう。石材を基本とする中国の宮殿はいずれもそれらを持たないし、「指二本分の黄金の床」というのは、厚さも色も畳そのものである。驚異に耳ざといこの作者がそれを聞き逃すはずはなかった。また、赤い真珠（赤玉・珊瑚）やその他の貴石もいっぱいあると言う。

150年後にジェノヴァの航海士の目を引いたのもこの情報であった。フィレンツェの天体学者トスカネッリの計算に基づいて地球の円周を小さく見積もったコロンブスは、ポルトガルから西へと航海すればカタイに至ることができると計算し、その途中必ずジパングに遭遇すると読んだ。大陸から商人も誰も渡らないという情報も、大いに彼の欲望を駆り立てたことであろう。もっともこれは事実と反し、日本との交易は宋代ほどではなかったが、元になってからも続いていた。泉州の福建路市舶司趙汝适『諸蕃志』（1225年）の「倭国」の項には、日本人は大きな船で泉州にやってきて交易するが、「泉州の人で倭国にいったものはいない」とあるところからすると⁵、対日貿易は寧波が主であったため、泉州ではそのように誤解されていたものか。

が、コロンブスには先達がいた。グラン・カン・フビライである。彼もこの黄金のことは聞き知っていたであろうし、しかも僅か1,500マイル、手の届く距離にある。しかし、フビライの目的は征服にあった。モンゴルは、世界征服というチンギス以来の目標をまだ捨てていなかった。が、この筆者は彼の目的をその島の莫大な富を奪うためとし、実際は失敗したその遠征を、以下のような半ば成功の物語に仕立て上げる。

そこでグラン・カンは、「アバタンとヴォンサニチン」という二人の武將に大軍をつけて派遣する。ザイトンとキンサイから出港した彼らは島に着いて上陸し、多くの平地や集落は奪ったが、都市はひとつも征服できなかった。そのうち二人の間に妬みが生じ、互いに従おうとしない。ある日激しく北風が吹き荒れ、難破を恐れて海上に出たが遭難し、4マイルほど先の小島に上陸して3万人は助かったが他の者たちはあるいは海にのまれ、あるいは残った船で本国に逃げ帰った、というのが前半である。

よく知られた史実ゆえ個々の検証は省略するが、ここまでは細部に混乱や短絡を見せながらも、出来事にほぼ沿っている。アバタン Abatan とヴォンサニチン Vonsanicin とは、弘安の役（1281年）の二人の将軍、日本行省左丞相阿剌罕 A-la-han と右丞相范宰相 Fan-zai-xiang（范文虎）に当る。遠征軍は、旧南宋の江南軍と高麗の東路軍から成り、泉州と杭州ではなく、前者は慶元（寧波）、後者は合浦から出港した。ただし、阿剌罕は病を以って阿塔海に代っていたし、その阿塔海も遠征には参じていない。江南軍の指揮者は范文虎であったが、東路軍は欣都と洪茶丘（いずれも文永の役の将）であったから、後

者は無視されていることになる。二人の重臣の間に不和があつて互いに協力しなかったというのは、江南と高麗の混成軍で結束を欠いたことを伝えと見られる。平地や集落は奪ったが都市は征服できなかったというのは、それまでの不首尾すなわち文永の役（1274年）の失敗のことを指すのであろう。

以上のFに対して、Zにはさらに細部がある。兵は海上に避難したが、「風の勢いが激しくなり、船の数が多かったので、その大部分が互いに衝突して砕けてしまった。他の船とぶつからず海上に分散していた船は、難破を逃れた。近くにさほど大きくない別の島があり、海に漂っていた者の多くがそこに難を逃れた。その数は多かった。島にたどり着けなかった者は皆亡くなった。その島ではまた、艦隊の多数の船がそこに吹き付ける風によって粉碎された」。実際、大風（台風）によってどのようなになったかは想像に難くないし、このとおりの事が起こったことを多くの書が伝える。

さらに、「風の勢いと海の嵐の怒りが収まると、二人の重臣は、広い海にあつて難破を逃れた船——それは多数あつた——とともに前述の島に戻り、高い地位にあつた者すなわち百人隊、千人隊、万人隊の長たちを皆船に乗せた。その他の者は、数多かったから船に収容することはできなかった。その後そこを去って、帆を祖国の方に向けた」⁶。『元史』日本伝は次のように伝える：「八月、諸将未だ敵を見ざるに、全師を喪つて以て還る。乃ち言う、日本に至り、大宰府を攻めんと欲す。暴風舟を破る。なお戦わんことを議せんと欲せしも、万戸厲徳彪・招討王国佐・水手総管陸文政等、節制を聴かず、輒ち逃れ去る」。これに、日本軍の捕虜となつたが脱走して帰国した江南軍の兵士于闐の供述が続く：「八月一日、風舟を破る。五日、文虎等の諸将、各々自ら堅好の船を択びてこれに乗り、士卒十余万を山下に棄つ」。また『蒙古襲来絵詞』にも、肥後国のさる御家人が主人公竹崎長長に語る言葉に、「鷹島の西の浦より破れ残り候舟に、賊徒あまた混み乗り候を払い除けて、しかるべき物どもと思へ候乗せて、早に逃げ帰り候」（詞十一）とある⁷。

万戸長や高官の名前こそないが、Zの記事に語られる状況はこれらとほぼ正確に一致する。『絵詞』の成立は永仁年間（1293-99）とされるから同時期であり、『元史』（1370年）には約70年先立つ。上の文はかの戦のことを、しかもかなりの精度で伝える最も早い記事となる。筆者はすなわち、最初の国際ジャーナリストでもあつた。日本遠征とその失敗のことは、当然ながら巷でも大きな話題となつていたのであろう。『元史』とよく一致することはまた、何らかの資料例えばその報告書のようなものが用いられたこと、そしてそれに接触できるような立場にあつたことを示唆し、フビライの近くにあつたというかの言い分を支援する一つの根拠となる。これらの細部を後から補うことは難しく、散らばり型の異なりであることからしても、最初からあつたと考えてよい。その場合は、Fで省かれたことになる。また、この戦は全編で唯一の海戦であり、ルスティケッロも勝手が違つたのであろう、他の戦記物語のスタイルとずいぶん異なる。

RもこれらZと同じ文をもつが、全体的にかなりの程度に要約されている。Zにもない文には、「時化はますます激しくなり、多くの船が壊れた中にいた者は板切れに掴まって泳いで」、「タルタル人（約3万人だつた）は、船がなく隊長たちから見捨てられたのを見、また戦うための武器も食糧もないまま、とりわけその島には避難する住まいがなかったか

ら、**捕まって**殺されるのを覚悟した」(Pより)がある。「板切れに**掴まって**泳いで」も含めて、後から想像で補うことも難しくはない。

ところが、以上の前半に対して、島に取り残された者たちのその後の運命を語る後半は、いくつかの事実を踏まえながらも、まるで別の戦かでなければ創作に近い。先に三版のテキストを掲げる。

2. Ch.161 : ジパング遠征 (後半)

1) F : Ms.fr.1116 (75v.b 1 -76r.b32) ⁸

Comant les iens ¹dou gran kan escanpoie de la tempest de la mere² e pristrent puis la cite de lore³.

Or sachies que quant celz .xxx^m. homes escanpes estoient sus l'isle, il se tenoient a plus que mort, por ce qu'il ne uoient e⁴ nulle mainere comant il peusent escaper⁵. Il auoient grant ire e grant douleur e ne sauoient que il douessent faire.

En tel manere com ie uoç di demoroient celz sus l'isle. Et quant le sire e les iens de la grant isle uirent que l'ost estoit si desbarate & rote, e seurent de celz que escampes estoient sus l'isle, il en ont grant ioie e grant leese. e tantost que la mer fo abonace & coie, il entrent en maintes nes qu'il auoient por l'isle, e s'en alent tuit droit a l'isle, e desmontent maintenant tuit en tere, por prandre celz qui estoient sus l'isle. Et quant celz .xxx^m. uirent que tuit lor ennemis estoient desendu a terre⁶, e uoient que sus les nes ne estoient remes nulle iens por garder, il, sercome⁷ saies iens, quant lor enemis uenoient por elz prendre, il se tornent de l'autre part de l'isle, e s'esproicient tant que il uindrent a les nes de lor enemis. & hi montent sus tout maintmant. e ce postrent il bien faire legiermant, poe ce qu'il ne treuuent qui lor le defendist.

Et que uoç en diroie? puis qu'il furent sus le nes, il se partirent de cele isle, & s'en alent a l'autre ysele. Il desenderent en tere, e con les confalonz e con l'enseingnes do sire de l'isle, s'en alent a la mestre cite. & celz, que uirent lor confalonz, cuident uoiermant que cesti fuissent lor iens. Il les laissent entrer dedens la uile, & celz que ne i treuuent homes se uielz non la pristrent & en chacent toute iens hors, fors seulement auquantas beles femes qu'il hi tienent por lor servir. En tel mainere com uoç aues oi, pristrent celle cite les homes au grant kan.

Et quant le sire & les iens de le isle uirent qu'il auoient perdu lor cite e que l'afer estoit ales en tel mainere, il uoient morir de dolor. il se tornent cun autres nes a lor ysele, & firent aseier la cite tout enuiron, si que nul hi poroit entrer ne eusir⁸ sanç lor uolunte. Et que uoç en diroie? Les iens au grant kaan tindrent celle cite. vii. mois, & mult prochachoient, & ior & nuit, comant il peussent fair sauoir au grant kaan ceste afere. Mes tout ce ne uaut rien qu'il le peussent faire. E quant il uoient que il non poient ce faire, il font pat con celz dehors e se redirent⁹ sauue lor persone, en tel mainere que il hi doivent demorer tout lor uie. Et ce fu a les .mccclxiiij. anz de l'ancarnasion¹⁰ de crist.

Ensi ala l'afer com uoç aues oi. E le grant kaan fist trencer la teste a l'un des baronç que chaueitan estoit de ce l'ost, e le autre mande a l'isle ou il fait destruer maintes iens & iluec le fist morir. E ce fist il por ce que il auoit seu qu'il ¹¹estoiert esproicies maueismant en cel afer.

Et encore uoç di une mout grant meruoie: que cel deus baronz pristrent en cel isle plusors homes en un castiaus, et por ce que il ne s'auoient uolu render, les deus baronç comandet¹² que il fuissent tuit mors e que il fuissent a tuit tronche la teste. & il ensi fui fait. car a tuit furent tronches le teste, for que a viii. homes seulmant. & a ceste ne poient fer truncher la teste. E ce auenoit por uertu de pieres qu'il auoient. Car il auoient chascun une pieres en son braç, dedens entre la cars e la pelle, si que ne poroit¹³ dehors, e [de]¹⁴ ceste pieres estoit si encante, et auoit tel uertu que tant come l'en l'aust soure ne poroit morir por fer. Et les baronz, que fu lor dit la chaison que cel ne poient morir por fer, il les font amaçer con maque, e celz morrurent¹⁵ mantinant. Puis font il traire de les brace cel pieres, e¹⁶ le tienent mout chier.

Or ensint auint ceste estoire & ceste matiere com ie uos ai diuiss¹⁷, ceste estoire de la desconfiture de les iens dou grant kaan. si en lairon atant, & retourneron a nostre matiere por aler auant de nostre liure. [Benedetto: 1 gens 2 mer 3 lors [enimis] 4 e[n] 5 esca[n]per 6 tere 7 sicome 8 ensir 9 re[n]dirent 10 aucarnasion 11 [s'] 12 comande[n]t 13 paroit 14 [--] (削除) 15 morurent 16 et 17 diuise] ⁹

「グラン・カンの兵はいかに海の嵐を逃れ、その後自分たちの〔敵〕の市を奪ったか。

さて、これら三万の兵は島に逃れたとき、どうすれば助かるか何も見付からなかったのもはや死しかないと覚悟したことをご存じください。ひどく怒り嘆いたが、どうしていいかわからなかった。

今話したようにして、彼らはその島に留まっていた。かの大きい島の君主と兵は、敵軍がこのように潰滅したのを見、逃れた者たちがその島にいるのを知って、大いに喜び嬉しがった。海が風いで静まるや、島にあったたくさんの船に乗り込み、真っ直ぐにその島へと向かった。そして島にいた者たちを捕まえんと、すぐに皆上陸した。かの三万人は敵が皆上陸したのを見、しかも船には見張りの者が誰も残っていないのを見て、賢い者たちだったから、敵が自分たちを捕まえに来ると、島の反対側に回り、大急ぎで敵の船のところに來たり、すぐさまそれに乗り込んだ。それを守る者は誰もいなかったのも、全くやすやすとそうすることができた。

で、何を話そうか。彼らは船に乗り込むと島を発ち、別の島に行った。そこに上陸し、その島の君主の流旗と紋章をもって首都に向かった。すると彼らは、その旗を見て彼らを自分たちの兵だと本当に信じた。それで、彼らを町の中に入らせた。彼らは老人しか見かけなかったものだから町を奪い、自分たちに仕えさすために取っておく美女だけ何人か除いて、全員外に追い出した。お聞きになったようにして、グラン・カンの兵はこの市を取ったのだった。

かの島の君主と兵は、市を失ったことと事態がこうなったことを見て、嘆きのあまり死ななばかりだった。彼らは別の船で島に戻り、市の回りをすっかり包囲させたため、誰も許し

なしに出入りできなかった。で、何を話そうか。グラン・カアンは兵はこの市を七か月持ち堪え、昼も夜も、この事態をいかにグラン・カアンに知らせることができるか大いに努力した。しかし、いかにしても知らせることはできなかった。できないことが分かったと、彼らは外の者たちと取り決めを結び、生涯ずっとそこに住むというかたちで、命は救われて降伏した。時に、クリスト受肉の一千二百六十九年のことであった。

と、このようになった。で、グラン・カアンは軍の隊長だった重臣の一人の首をはねさせた。もう一人は、彼が多数の人々を破滅させていた島に送り、そこで死なしめた。そうしたのは、彼らがこの出来事で無様なことをしてかしたと知ったからだ。

もう一つ大いに驚くべきことをお話しよう。かの二人の重臣は島のある城市で何人もの者を捕まえたが、彼らは降伏しようとしなかったので、二人の重臣は、皆処刑にし皆の首をはねるよう命じた。そして、そのとおりされた。事実、全員首をはねられたのだが、八人だけはそうではなかった。これらの者は首をはねさせることができなかった。これは、彼らがもっていた石のおかげで起こった。つまり、彼らはそれぞれ皆腕の中の肉と皮の間に石を一つもっており、それは外から見えず、その石は魔法がかかっている、それを身に付けている限り鉄で殺すことはできないような力をもっていたからだ。重臣は、彼らを鉄で殺せない原因が言われると、棍棒で殴り殺させた。するとすぐに死んだ。その後彼らは腕からその石を取り出させ、とても大切にした。

この出来事とこの話題、グラン・カアンの兵の敗北というこの出来事は、今お話したようにして起こった。で、これでお終いにし、我々の話題に戻って本書を先に進めよう」

2) Z : Ms.49.20.Zelada (56v.18-58r.10) ¹⁰

Qualiter gentes magni can a tempestate maris evaserunt et post modum ceperunt civitatem inimicorum.

Dum vero qui ad supradictam insulam evaserunt, ut predicitur, taliter remanerent in ea absque spe discedendi abinde. Quid accidit?

Dominus et gentes insule magne, videntes quod exercitus inimicorum fuerat taliter destructus et fractus, et scientes de illis qui super insulam evaserant, multum fuerunt gaudentes. Et statim cum mare fuit quietum, intrantes navigium quod erat per insulam illam, ad hanc insulam pervenerunt, et descenderunt in terram causa capiendi illos qui super insulam remanserunt. Et cum illi vidissent quod omnes eorum inimici ad terram descenderant et quod nullus remanserat super naves, tanquam sapientes egerunt. Nam insula erat multum in medio sublevata. et dum inimici properarent ad eos, ipsi ceperunt iter ad partem unam insule, et circumtes ipsam ab alia parte, pervenerunt ad navigium inimicorum, non invenientes ipsum aliquibus ex hostibus ocupatum: nam omnes recto tramite per partem per quam isti fugerant eos fuerant insecuti, nec affecti erant in hoc. Et isti, ascendentes navigium, ad inimicorum insulam pervenerunt, et descendentes ad terram cum vexillis domini insule, ad civitatem magistrum iter verterunt. Et illi qui in civitate remanserant, qui solummodo senes erant et mulieres, videntes vexila, crediderunt

eorum gentem esse et eos intrare dimiserunt. Isti vero, habita civitate, omnes de civitate expulerunt, exep̄tis certis pulcris mulieribus, quas pro eorum necessariis tenuerunt. Et quemadmodum audivistis, homines Magni Can civitatem ceperunt. Et tunc cum dominus et gentes insule vidissent quod sic eis evenerat, mirabiliter doluerunt, et cum residuo navigii ad insulam redeuntēs, civitatem taliter obsiderunt quod, absque eorum consensu et velle, introitus et exitus civitatis aliquibus non patebat¹. Gentes vero Magni Can civitatem multo tempore tenuerunt, procurantes cotidie notificare negotium Magno Can. Sed nullo ingenio valuerunt propositum suum ducere ad effectum; quare finaliter cum exterioribus pactum et concordiam contraxerunt, videlicet quod salvis personis, ibi permanere deberent totis temporibus vite sue. Et sic fuit servatum.

Magnus vero Can unum ex duobus baronibus qui capitaneus exercitus illius extiterat decapitari mandavit. Alterum vero misit ad quamdam silvestrem insulam nomine Çorça, in qua gentem multam, propter graves offensas, facit destruere in hunc modum. Nam cum aliquem mitit destruendum ad insulam predictam, facit sibi manus cum corio bufalli tunc nuper excorticate optime circumvolui, et stricte sui. Et cum illud corium desicatur, ita restringitur circa manus quod nullo modo posset abinde moveri. Et sic dimititur ibi pasionata morte finire, quia se iuvare non potest et ad comedendum non habet. Et si comedere vult de erbis, oportet ut serpat per terram. Et per hunc modum fecit baronem perire. Et ideo tam crudeliter fecit ipsos tractari, quia quod nequiter se gesserant in illo exercitu intellexit.

Item vobis unum mirandum dicemus, videlicet quod dicti duo barones in supradicta insula castrum unum ceperunt. Et, quia hominess de castro se reddere contempserant, preceperunt quod omnes forent decapitati et mortui. Decapitati fuerunt omnes, exceptis novem qui nullo modo fero poterant incidi. Et hoc erat virtute quorundam lapidum, quia quilibet eorum lapidem unum habebat intra pelem et carnem, ita quod non videbatur exterius. Et isti lapides erat¹ taliter incantati et talem habentes virtutem, quod ferro mori non poterant donec supra se ipsos haberent. Quo intellecto per barones, eos fecerunt clavis mactari, et mortui sunt; quibus mortuis lapides fecerunt de brachiis eorum extrahi, quos valde caros tenebant. Et isto modo accidit de hac ystoria qualiter audivistis. [Barbieri: 1 era<n>t]

「マグヌス・カンの兵はいかにして海の嵐を逃れ、その後敵の市を奪ったか。

前述の島に逃れた者たちは、上に述べたとおり、そこから出発する望みもなくそこに残っていたのだが、どうなったか。

大島の君主と人々は、敵の軍がこのように破壊され粉碎されたのを見、また島に逃れたものたちのことを知って、とても喜んだ。海が鎮まるとすぐに島にあった船に乗り込んでその島にやって来、島に残っていた者を捕えるべく上陸した。彼らは、敵が皆上陸し、船に誰も残っていないのを見て、巧妙に行動した。実際、島は真ん中がとても高くなっており、敵が自分たちの方

に急いでやって来ると、彼らは島の一方に行き始め、その反対側に回り、敵の船のところにやって来ると、そこは敵は誰も守っていなかった。じっさい皆、彼らが逃亡した方の道を真っ直ぐ追跡してゆき、そのことには備えていなかった。で彼らはその船に乗って敵の島にやって来、その島の君主の旗をもって上陸し、首都に向かって行った。都に残っていた者たちは、老人と女たちばかりだったが、その旗を見て、自分たちの側の者だと思って入らせた。彼らはしかし、市を奪うと皆町から追い出し、何人かの綺麗な女たちだけを自分たちの必要のために手元に置いた。お聞きになったようにして、マグヌス・カンの兵はその市を奪った。一方島の君主と兵は、このように自分たちの身に起こったことを見てひどく嘆き、残っていた船で島にとって返し、市を包囲したので、彼らの同意と許しなしに誰も町に出入りすることはできなかった。マグヌス・カンの兵は長期間市を占領していたが、日々マグヌス・カンに事態を知らせようと努めた。しかし、いかなる妙案をもってしてもその企てを実現することはできなかった。そのためとうとう外の者と協定と和平を結んだ。すなわち、命を助ける代わりに生涯そこに残るというものがあった。そしてそのとおり守られた。

マグヌス・カン、自分の軍の隊長だった二人の重臣の一人を首をはねるよう命じた。もう一人は、ゾルザという未開の島に送った。彼はそこで、重大な謀反のかどで多数の者を次のようにして処刑させていた。上述の島に誰かを処刑に送ると、その手を剥いだばかりの水牛の革でぴったりと包ませ、きつく縫わせる。革は、乾燥するにつれ手の周りを締め付け、どのようにしてもそれから抜くことはできない。こうしてそこに放置され、苦悶のうちに死に至る。自ら助けることもできず、食べ物を得ることもできないからである。草を食べたければ、地を這うしかない。このようにして彼は重臣を死なせた。かくも残酷な仕打ちに処したのは、この軍事において彼らが無様に行動したと知ったからである。

さて、驚異を一つ皆さんにお話ししよう。すなわち、二人の重臣が前述の島でさる城市を取ったときのことで、その城市の者たちは降伏を拒んだので、皆首を切って殺すべしと命じた。皆首を刎ねられたが、九人だけはどうしても鉄で切ることができなかった。これは、ある石のおかげだった。つまり、彼らはそれぞれ皮膚と肉の間に石を一つ持っていて、そのため外からは見えなかった。その石は魔法をかけられ、次のような力をもっていた。すなわち、それを身に付けている限り、鉄で殺されないのだった。それを知った重臣は彼らを棍棒で殴らせ、かくして死亡した。彼らは死んだ者たちの腕からその石を取り出させ、とても大事に取っておいた。このことは、お聞きになったように起こったのであった」

3) RIII 2 (2) (Ed. Milanese, p.253, l.22-p.254, l.7)

Cessata la fortuna ed essendo il mare tranquillo e in bonaccia, gli uomini della grande isola di Zipangu, con molte navi e grande esercito, andarono all'isola vicina per pigliare li Tartari che quivi s'erano salvati, e smontati delle navi si misero ad andarli a trovare con poco ordine. Ma li Tartari prudentemente si governarono, perciocché l'isola era molto elevata nel mezo, e mentre che li nemici per una strada s'affrettavano a seguirarli, essi andando per un'altra circondarono a torno l'isola e pervennero a' navilii de' nemici, quali truovorno con le bandiere e abbandonati; e sopra quelli immediate montati andarono

alla città maestra del signor di Zipangu, dove, vedendosi le loro bandiere, furono lasciati entrare, e quivi non trovorno altro che donne, le qual tennero per loro uso, scacciando fuori tutto il resto del popolo. Il re di Zipangu, intesa la cosa come era passata, fu molto dolente, e subito se ne venne a mettere l'assedio, non vi lasciando entrare ne uscire persona alcuna, qual durò per mesi sei; dove, vedendo i Tartari che non potevano aver aiuto alcuno, al fine si resero salve le persone: e questo fu correndo gli anni del Signore 1264.

Il gran Can dopo alcuni anni, avendo inteso il disordine sopradetto, successo per causa della discordia di due capitani, fece tagliar la testa ad un di loro, l'altro mandò ad un' isola salvatica detta Zorza, dove suol far morire gli uomini che hanno fatto qualche mancamento, in questo modo: gli fa ravigliare tutte due le mani in un cuoio di buffalo allora scorticato e strettamente cucire, qual come si secca si stringe talmente intorno che niun modo si può muovere, e così miseramente finiscono la loro vita, non potendosi aiutare.

「時化が止み海が鎮まって穏やかになると、大ジパング島の者たちは多数の船と大軍をもって、近くの島に逃れていたタルタル人をそこに捕まえに行き、船から上陸して彼らを見つけにばらばらに行った。しかしタルタル人は思慮深く行動し、島は中央がとても高くなっていたので、敵が一つの道を急いで追跡してくると、別の道を取って島をぐるっと周り、敵の艦隊のある所にやって来、船が旗をつけたまま乗り捨てられているのを見つけた。彼らはすぐにそれに乗り込み、ジパングの君主の首都に向かった。そこでは、自分たちの旗が見えたため、入るがままにされた。そこには女たちしかいず、それを自分たちの用に取っておき、残りの者は皆追い出した。ジパングの王は、事態がどうなったか知って大いに嘆き、すぐ攻囲しに来、誰一人出入りできぬようにし、こうして六か月続いた。タルタル人はなんの助けも得られないのを見て、とうとう命は助けてもらって降伏した。これは主の一千二百六十四年のことであった。

何年か後グラン・カン、二人の隊長の不和によって生じた上述の不首尾のことを知って、一人は頭を刎ねさせ、もう一人はゾルザという未開の島に流した。そこはいつも、何か失敗をしでかした者を死なせるところで、次のようにする。両の手を剥いだばかりの水牛の皮にすっかり包み、きつく縫わせる。するとそれは、乾くにつれてきつく絞まってくるから、どうやっても身動きできず、こうして自ら助けるすべもなく哀れにその生を終えるのである」

ほぼ正確な記述であった前半に比べると、まるで出来のよくないお伽話であるが、いくつかの事実は踏まえている。まず、島に取り残された兵の数「3万」は、「師を喪うこと十の七、八」と伝えられるのとは一致する（『元史』巻129「阿塔海伝」）。さらに、鷹島で彼らが何とか帰国の途を探ったこと、日本軍が掃討にやってきたこと、一部は博多に上陸したこと、捕虜となった兵のうち唐人（南宋人）は命は助けられたことなどである。前述『元史』の敗卒于闐の弁明はさらに次のように続く：「衆議して張百戸なるものを推して主師となし、これを号して張総管といい、その約束を聴く。方に木を伐りて舟を作り還

らんと欲す。七日、日本人来り戦い、尽く死し、余の二、三万は、そのために虜去せらる。九日、八角島に至り、尽く蒙古・高麗・漢人を殺し、新附軍〔江南軍〕は唐人たりといい、殺さずしてこれを奴とす」。

それが上のごとく、敵の船を奪っての島からの脱出と首都への進攻、7か月の占領とその後の取引きと和平と、敗北はむしろ半ばの勝利へと大きく変わっている¹¹。この異なりは、事実によく即していた前半に対して、この後半部分の情報あるいは典拠が別だったことを推測させる。ポーロ自身が間違ったことは、まずありえない。当時大都あるいはザイトンの巷でこのように噂されていたのを聞き伝えたというのも、次にフビライの厳しい処罰のことが記されていることからして考え難い。とすれば、別の資料が使われたか、筆録者の潤色である。記録的であった前半に対して、後半のスタイルはルスティケッロの戦の物語によりふさわしい。が、基礎となる出来事まで創作することは考えられない。となると何か別の戦のことで、例えば次の対チャンパ（占城）遠征（1282～84年）の出来事が混交している可能性は高い。チャンパでは、モンゴル軍はいったん首都を占領するが、後に反攻にあって敗退した。大まかな筋は合致する。国名の似かよるとこの後半がまるで別の戦いのように1章とされていることがそれを側面から支持する。その場合は、ルスティケッロはポーロのメモ・ノートをかなりの自由さで扱うことの出来たことを意味し、この書の成立過程における二人の関係のあり方に一つのヒントを与える。

が、記述の上では遠征の続きであり舞台はあくまでジパングである。例えば小さなことであるが、島の反対側を回って敵に発見されずに船にたどり着くところで、Z「島は真ん中がとても高くなっており」とあるのは、追っ手から逃れるよくある単純な舞台設定でなければ、あるいは全体としての本州の地形とりわけ富士山のことが伝わっていたものとも想像できる。『元史』には見えないが、『宋史』には日本の地形は、「西界南界はみな大海に至り、東界北界は大山ありて限りをなし」（同『旧唐書』）と、中央ではないが、大山のあることを伝える。女性については、文永の役の時には壱岐で元軍が多数の女性を生け捕りにすることがあったことが記録されていることからして、第1回日本遠征の時のことも入っているのであろう。

この章つまり後半は、筋書きは三版ともよく一致し、いくつかの小さな表現上の異なりを除いて大筋は変わらない。事実に係る唯一の違いは、この出来事の年F「1269年」に対するR「1264年」である。PはFに同じで、Zには年次はない。その他では、ジパングの首都を制圧したタルタル人たちはF・Z・Rでは命と引き換えにそのままそこに留まって終わっていたのが、TA・LT・P・VBなどでは、都を引き渡して無事祖国に帰還する。例えばVB：「タルタル人は、祖国に安全に帰ることができ国に至るまでに必要な十分なものが保証されれば、土地と女性を返すことに同意していた。また、彼らがタルタル人を給料を払って留めておきたいのなら、そのことにも同意していた。…何年も戦をしたことがなく、それを酷く嫌い、とりわけ自分たちの女性が敵の手と力の中に失ったことを嘆いていた島の者たちは、それを二度と取り戻せないと考え、タルタル人がそれを返す用意があるのを見て、そのすばらしい提案に喜び満足し、提供された条件で和平するよう一丸となって王に迫った。かくして和平となり、土地は王のもとに戻った」¹²。写字生の大きな介入の一

例である。

現実には、この敗北と失態が許されることはもちろんなく、グラン・カンは重臣の一人を斬首し、もう一人は重罪人の島に配流したと、この書も伝える。事実、フビライはこの失敗に激怒し、責任者を処罰したし、実現はしなかったが3度目の遠征を命じたことが、やはり『元史』に見える。文脈からすれば前出二人の将軍のこととなるが、アバタン阿剌罕は病を得て加わってはず、ヴォンサニチン范宰相（范文虎）はその後も活躍していることが確かめられる。配流先として、Z・Rには「ゾルザという未開の島」との名が挙げられる。ゾルザは同書では満州の地を指して使われているが、島とあることからして樺太島が考えられる¹³。Fが上の事実を伝えるだけであるのに対して、Zにはさらにそこでの処刑の方法の詳細があった。これらは、先の記事とは逆に、統治機構の中にあつたのでなければ入手の難しい情報であり、作者がそうした立場にあつたことを推測させる。遠征失敗の責任者の処罪の詳細は明らかでなくどの文献にも記されていないといわれるが、以上から見るに、これがその一端を伝えている蓋然性は高い。補い型の独自記事で、これがポーロ以外によって伝えられることが難しいとすれば、Fの祖本にはあつたが後に削られたか、ポーロのノートから新たにZに書き加えられたかになる。そのどちらかは決め難い。

最後に、征服したさる城市は降伏を拒んだので首を刎ねて皆殺したが、8人（Z：9人）だけはどうしても切れなかったので調べてみると、腕の皮膚と肉の間に魔法のかかった石を埋め込んでおり、それが刀を跳ね返した、そこで棍棒で殴り殺し、その石を我が物にして大切にしたという話が置かれている（R・Pでは前章）。西方の説話に古くからある鉄を寄せ付けぬ魔法の石の話の変形であり、筆録者による挿入と考えて間違いあるまい。それがここジパングに置かれたのは、次のチャンパ（占城）あるいはその次のジャワ国との音の似か寄りゆえの混同である。また、Zには前章の真珠の記事のところで、「この島では、死亡するとある者は埋葬されある者は火葬されるのだが、埋葬される者は誰でもそうした真珠を一つ口に入れられる」（Fなし）と、死者に珠を含ませる風習のあることを記す。が、日本との関係はなく、珠を口に含ませると屍が腐らないとの言い伝えから、中国であつた風習をその特産品として知られたジパングに置いたのであろう。

Pのジパングは5章（Ⅲ2～6）からなり、前述刀を撥ね付ける石の記事が前半に置かれていることと、首都を占拠したタルタル人が最後に命と引き換えに市を引き渡して帰国するという結末以外、小さな異なりは別としてもFと基本的によく一致する¹⁴。これまでどの章も要約的であつたのに対して、ジパングの章はほぼ全体が訳されているのは、布教のことを考えたためであろう。そこは、すでに幾分か知られ聖職者も何人か向かっているカタイ・マンジと違って、誰も行かぬという未知のしかも富裕な黄金の国だとあるではないか。このボローニャのドメニコ会士が上司から本書の翻訳を命じられたのも、そのためであつた¹⁵。

ところが、その訳を持ってそこに向かったのは、伝道僧ではなくジェノヴァの船乗りであつた。コロンブスが携えたピピヌスのラテン語版は、1485年アントワープでの最初期の印刷版の一本であつたことが知られる。最初の金と真珠の記事は、ほぼFのとおりの。商人の往来については、「王はそれが容易に島の外に持ち出されることを許さず、そのた

め商人はほとんど行かないし、他の地域から来た船もめったに寄港しない」と若干異なる(Rに同じ。つまりRはPの訳)。セヴィリアのコロンブス博物館に保存されているその原本には彼自身の手になる多くの書き込みが残っているが、この箇所には「大量の金」と「赤い真珠」の二つがあるだけで、意外と少ない¹⁶。ともあれかくしてジパングの黄金はグラン・カンに奪われずにすみ、コロンブスの希望が生れることとなったのであった。

3. Ch.162 : 偶像の有り様とチンの海

1) F : Ms.fr.1116 (76r.b32-77r.a28) ¹⁷

Ci devise des maineres des ydres.

Or sachies que les ydres dou catai e dou mangi e celz de [celz de]¹ ceste ysles sunt tuit d'une mainere. E uoç di que celz isles, et encore les autres ydres, hont ydres que ont chief de buief, e tel chief de porques, e tel de chien, e tel de monton, e tel de maintes autres faisonz. & de tielz hi a que ont un chief de quatre uix, e tiel ont trois chief, ce est le un come il doit [²] e les autres dues, un de chascune espaulle. e tiel hi a que ont quatre main, e tiel que n'ont .x. & de tiel que en unt .m.. Mes cestes sunt les meior & ou il ont greingnor reuerence. Et les cristies³ disoient elz porcoi il fasoient lor ydres si deuseemant; il respongent⁴: nostres ancestres les nos laissent & fiurent telz, & nos les lairon anren⁵ filz & a celz que uindrent après nos. les fais de cestes ydules sunt de tantes deuersites & de tantes cures⁶ de diables qu'il ne fait pas a mentouoir en nostre liure, por ce que trop seroit mauues chouse a oir por les cristienz. & por ce en lairon de cestes ydres e uoç conteron d'autres couses.

mes tant uos en dirai seulamant que ie uuoil que uoç sachies que cesti ydres de cestres⁷ ysles, quant il prennent aucun homes que ne soit lor amis, se il ne se puet rachater por monoie, il conuoie tuit sez parens e seq amis; e dit: ie uuoil que uoç ueingnes⁸ mengier ho moi a mon astiaus⁹. & adonc fait occire le home qu'il a pris, & le menuie con seq parenç. & entendes qu'il le fait cuire. & ceste chars d'ome ont il por la meilor¹⁰ uiande qu'il peusent auoir. or noç lairon de ce e retorneron a nostre matiere.

Or sachies que ceste mer la ou est ceste, [il le]¹¹ s'apelle le mer de cin, que uaut a dir le mer que est encontre le mangi, car ie uoç di que, en langaies de celz de cest ysles, uaut a dir mangi, quant il dient cin, que est a leuant & a selon que les saies pedot¹² dit e le saies mariner que hi naient & que bien seuent la uerite, .vii^m. et iiij^m¹³ & xlviij. ysles, les quelz s'abitent les plusorz. E si uoç di que in tute celles ysles ne naist nul arbres que ne en ueingne¹⁴ grant odor e buen, & que ne soit de grant utilite, bien ausi grant come le leingn¹⁵ aloe e greingnor. Il hi a encore maintes chieres espices de plusors faites. et encore uos di que en cestes ysles naist leur¹⁶ blance come nois, et encore dou noir, en grant abundance. Il est mout merueilloses couses la grant uailance¹⁷ de le or & de les autres chieres chouses que en cestes ysles sunt.

Mes ie uoç di qu'elles sunt si longnes¹⁸ que a grant anuie i se puet aler. Et quant les nes

de çairon¹⁹ ou de quisaï²⁰ h'uont²¹, il hi font grant profit e grant gaain. E si uoç di qu'il pignent a aler un an, car il uont le yuer e tornent l'estee, car les uent yci²² uentent for que de deus faites, le un que les porte & le autre que les retorne. E [ce]²³ uente le une d'estee e l'autre de yuer. Et sachies que ceste contree est loinge de indie grandisme quantite de uoie. Et encore uos di que por que ie uoç ai dit que ceste mer est apelle le mer de ci²⁴, si uoil ie que uoç sachies que ce est le mer osiane. mes l'en dit come droit le mer d'engleterre e lle²⁵ mer de rocelle, ausi dit l'en en celle contree le mer de cin, & le mer de indie, e le tel mer. mes toutes foies tuit cesti nonç sunt dou mer osiane. Or desormes ne uoç conterai plus de ceste contree, ne de cestes yslas, por ce que trop [26] desoiabiles²⁷, et encore que nos ne i somes estes. Et encore uos di que le grant kaan ne i ha que fer, ne ne li rendent treu ne rien. e por ce nos retourneron a çaiton e d'iluec recomenceron encore nostre liure. [Benedetto: 1 [--] (削除) 2 [estre] 3 cristie[n]s 4 respignent 5 a nostre 6 eures 7 cestes 8 veignes 9 /ostiaus 10 meillor 11 [--] 12 pelot 13 ^c 14 veigne 15 leign 16 pevre 17 vaillance 18 lognes 19 Çaiton 20 Qui[n]sai 21 hi vont 22 ne i 23 [--] 24 Cin 25 le 26 [sunt] 27 des[v]oiable]

「偶像の有り様について述べる。

さて、カタイとマンジとこの島の偶像崇拜は皆一つの類であることをご存じ下さい。いいですか、これらの島それに他の偶像崇拜者も、牛の頭とか豚の頭とか犬のとか羊のとかその他様々な種類の頭をした偶像をもっているのですよ。また、顔が四つある頭をしたのもある。あるものは頭が三つある。つまり一つは「ある」べきところに、他の二つは両肩にある。また手が四本あるもの、十本あるもの、千本あるものもある。そして、この最後のが最高で、より崇拜する。キリスト教徒は彼らに、どうして偶像をこれほど様々な風に作るのかと言う。彼らは、「我々の祖先がこれを我々に残したのだし、このようだった。我々も子供たちと我々の後に来る者たちにこれを残すだろう」と答える。これら偶像崇拜者のすることはそれほど奇妙で悪魔の業なので、もう我々の書で述べることはしない。キリスト教徒にとって耳にするのはあまりにも悪いことだからである。それでこれら偶像崇拜のことはこれで置き、別のことをお話ししよう。

しかしこれだけは言っておきたいが、次のことを知って欲しい。すなわち、この島の偶像崇拜者は味方でない者を捕まえた時、もし金で身請けされないと、親戚や友人を集めて、「さあどうぞ召し上がりに一緒に私の家に来て下さい」と言うのです。そして、捕らえた男を殺させ、親戚の者と一緒に喰らう。つまり料理させるということです。そして人間の肉は持ちえる最高の食べ物だと見なす。

さて、これはこれくらいにして、我々の話題に戻ろう。さて、この島のあるこの海はチンの海ということをご存じ下さい。マンジの向かいにある海という意味で、何故ならいいですか、この島の者の言葉でチンと言うとマンジのことだからです。その海は東にあり、優れた水先案内人やそこを航海して真実をよく知っている優れた船乗りの言うところによると、七千と四百と四十八の島があり、その多くに人が住んでいる。またいいですか、全てこれらの島には、強い良い匂いがしとても有益でアロエの木と同じくらいかもっと大きい木以外には何も生えてない

のですよ。さらに、いくつもの種類の高価な香辛料がいっぱいある。またいいですか、これらの島には雪のように白い胡椒、それに黒いのも、大量にできるのですよ。金や、これらの島にあるその他の高価な品々の大きな価値は全く驚くべきものである。しかしいいですか、とても遠いのでそこへ行くには大いなる困難があるのですよ。ザイトンかキ〔ン〕サイの船は、そこに行くと大きな利益と大きな儲けを手に入れる。いいですか、そこに行くには一年かかるのですよ。つまり冬に行って、夏に帰る。風は、そこに運ぶものとそこから戻すものの二種類しか吹かないからです。一つは夏に、もう一つは冬に吹く。また、この地域はインディエからの道のりがものすごく遠いことをご承知ください。さらにいいですか、この海はチ〔ン〕の海と呼ばれると言ったけれども、実は大洋であることを知って欲しいのです。それを、アングルテルの海とかロシエルの海というようにそう言うのです。同じようにこの地域では、チンの海とかインディエの海とかどこそこの海と言うのです。しかし、どの場合でもこれらの名前はすべて大洋のことなのです。

さて、その地域にしても島々にしても余りにも道から逸れるし、我々はそこに行ったこともないのだから、もう話すことはしない。もう一つ言っておくと、グラン・カアンはそことは何の関係わりもないし、彼らも貢ぎ物も何も一切納めないのですよ。というわけで、我々はザイトンに戻り、そこから本書をもう一度始めることにしよう」

2) Z : Ms.49.20.Zelada (58r.11-59r.15) ¹⁸

Hic naratur de modo et manerie ydolorum.

Posquam de hac ystoria naravimus et de debelatione et infortunio gentium Magni Can, nunc dicemus de marie¹ ydolorum. Noveritis itaque quod ydola Cathay et Mançi et de istis insulis sunt omnia de manerie una. Et illi de hac insula, et etiam alii ydola adorantes, habent ydola cum capitibus boum. Aliqua² sunt cum capitibus porcorum, aliqua canum, et arietum, et diversarum aliarum manerierum. Aliqua sunt habentia unum capud et duos vultus; aliqua sunt habentia tria capita, unum videlicet in loco debito, alia vero duo super quamlibet spatulam unum. Sunt etiam aliqua ydola quatuor manus habentia, aliqua .x., aliqua.m., et illa sunt que virtuosiora retinent et maiorem reverentiam habent in eis. Et quando christiani³ ab eis inquirunt cur eorum ydola faciunt sic diversa, respondent: sic reliquerunt nobis predecessores nostri, et nos nostris filiis et successoribus relinquemus. Sfakta quidem istorum ydolorum sunt de tot diversitatibus et operibus diabolorum, quod in nostro [4] dicenda non sunt, quoniam nimis nepharium et abhominabile foret talia enarare.

Sed tamen hoc scire vos volumus quod omnes adorantes ydola in hiis insulis comorantes, pro maior parte, quando aliquem hominem capiunt, qui non sit eorum amicus et qui se non valeat redimere pro moneta, convitant omnes consanguineos et amicos ad domus, et facientes hominem captum occidi, ipsum decocunt, et in caritate eum comedunt, tunc decoctum. Dicunt enim quod humana caro sapidior est et melior que valeat inveniri.

Et noveritis quod mare ubi est insula ista nuncpatur mare Cin, quod est dicere mare

quod contra Mançi est. Et in lingua istorum de hac insula Mançi vocatur Çin⁵. Et istud mare Çin⁶, quod est in levente, est tam longum et latum, quod sapientes pedote et marinarii qui per ipsum navigant et veritatem cognoscunt, dicunt quod sunt in eo septem milia quadrigente⁷ et quadraginte insule, que pro maior parte habitate sunt. Et in omnibus illis insulis non nascitur arbor de qua non prodeat magnus odor et bonus. Sunt ibi multe species de pluribus maneriebus et diversis. In istis etiam insulis nascitur in habundantis piper album et nigrum. Non posset [⁸] proferi valor auri et aliarum rerum que in insulis istis sunt. Sed sunt ita a terra firma longinque quod cum magno tedio navigatur ad ipsas. Et quando naves Çaitum vel Quinsay vadunt illuc, magnum consequuntur profectum et lucrum, sed per anum continuant perficere iter suum. Nam proficiscuntur in hyeme et reiterant inestate, quoniam habent solum de duabus meneriebus ventos, quorum unus regnat in estate, alter in hyeme, ita quod cum uno portantur et cum alio reducuntur. Et istas contrata multum ab Yndia distat. Et quia vobis diximus quod mare hoc Çin⁹ nuncupatur, tamen volumus vos scire quod hoc mare Oceanum est. Sed quemadmodum nos dicimus Mare Anglicum et Mare Egeum, sic dicunt ipsi Mare Cin et mare Indum, sed omnia ista nomina sub Mari Oceano continentur. Admodo de hac patria et insulis dimitentes, quia nimis devia loca sunt nec dominum Magni Can habetur in ipsis, revertemur ad Çaitum. [Barbieri: 1 ma[n]erie 4 libro 5・6・9 Cin 7 quadri[n]gente; Moule: 2 alique (以下同) 3 xpistiani 8 [quod]]

「偶像の有り様と種類についてここに語られる。

以上の話つまりマグヌス・カンの兵の敗北と災難について語ったので、これから偶像の有り様について述べよう。カタイとマンジそれにこれらの島の偶像は全て同じ種類であることを知ってください。この島の者たちは、それに他の偶像崇拜者も、牛の頭をした偶像をもっている。あるものは豚の頭、あるものは犬また羊、その他様々な種類の頭をしている。あるものは頭が一つと顔が二つある。あるものは頭が三つあって、一つはしかるべきところに、他の二つは両肩に一つずつある。また、手が四本ある偶像もあり、あるものは十本、あるものは千本あり、この最後のが一番徳があると見なされ、それを最も崇拜する。キリスト教徒が彼らに偶像をどうしてこれほど異なる風に作るのかと尋ねると、彼らは「我々の祖先がこのように我々に残したし、我々も子供と子孫に残すだろう」と答える。これら偶像のことはこれほど奇妙で全て悪魔の業なので、本〔書〕で述べることはない。そうしたことを語るのは余りにも不信仰で忌まわしいことだからである。しかし次のことは知っていただきたい。この島々に住む偶像を崇める者は皆、大部分、誰かを捕まえると、味方でない者や金で身請けできない者だと、親族や友人を皆家に招いて捕まえた者を殺させ、それを料理し、よく煮えたと嬉々としてそれを喰らう。そして、人間の肉は一番美味しく、見出しうる最高のものだと言う。

この島のある海はチン海と呼ばれることをご存じ下さい。マンジの向かいにある海という意味です。またこの島の者たちの言葉で、マンジはジンと呼ばれる。そのジン海は、それは東の方にあるが、とても長く広く、そこを航海し真実をよく知っている優れた水先案内人や船乗りた

ちは、そこには七千四百と四十の島があり、その大部分に人が住んでいるという。これらの島のどこでも、強い良い匂いを発しない木は生えない。多くの種類の色々な香味がたくさんある。その島にはまた白と黒の胡椒が大量にできる。金その他その島にあるものの価値は言うことはできない。しかし本土から遠く離れているため、そこへ航海するには大変な困難を伴う。ザイトゥムあるいはキンサイの船は、そこに行くと莫大な利益と儲けが得られるが、そこに行き着くには丸一年かかる。事実、冬に発って夏に戻って来る。二種類の風しかないからで、一つは夏もう一つは冬に吹き、こうして一つで運ばれもう一つで戻されるのである。この地域はインディアからとても遠く離れている。この海はジンと呼ばれると言ったけれども、これはオケアヌス海であることを知っていただきたい。つまり、我々がアングル海とかエーゲ海と言うように、彼らはチン海とかインド海と言うのだが、しかしこれらの名前は全てオケアヌス海の下に含まれる。さて、この国と島々のことは、あまりにも道から逸れたところだし、マグヌス・カンの支配もそこには及んでいないことだから、これくらいにしてザイトゥムに戻ろう」

3) RIII 3-4 (Ed. Milanese, p.254.l.8-p.255.l.27)

RIII3: Della maniera degl'idoli di Zipangu, e come gli abitanti mangiano carne umana. In quest'isola de Zipangu e nell'altre vicine tutti i loro idoli sono fatte diversamente, perché alcuni hanno teste di buoi, altri di porci, altri di cani e di becchi e di diverse altre maniere; ve ne sono poi alcuni che hanno un capo e due volti, altri tre capi, cioè uno nel luogo debito e gli altri due sopra cascuna delle spalle, altri ch'hanno quattro mani, alcuni dieci e altri cento, e quelli che n'hanno più si tiene ch'abbiano più virtù, e a quelli fanno maggior riverenza. E quando i cristiani li domandano perché fanno li loro idoli così diversi, rispondono: «Così i nostri padri e predecessori gli hanno lasciati, e parimente così noi li lasciamo a' nostri figlioli e successori». Le operazioni di questi idoli sono di tante diversità, e così scelerate e diaboliche, che saria cosa empia e abominabili a raccontarle nel libro nostro. Ma vogliamo che sappiate almeno questo, che tutti gli abitatori di queste isole che adorano gl'idoli, quando prendono qualcuno che non sia loro amico e che non si possa riscuotere con denari, convitano tutti i loro parenti e amici a casa sua, e fanno uccidere quell'uomo suo prigioniero e lo fanno cuocere, e mangianselo insieme allegramente, e dicono che la carne umana è la più saporita e migliore che si possa trovar al mondo.

RIII4: Del mare detto Cin, ch'è per mezzo la provincia di Mangi. Avete da sapere che 'l mare dov'è quest'isola si chaima mare Cin, che tanto vuol dire quanto mare ch'è contra Mangi; e nella lingua di costoro dell'isola, Mangi si chiama Cin. E questo mare Cin ch'è in Levante e così lungo e largo che i savi piloti e marinara, che per quello navigano e conoscono la verità, dicono che in quello vi sono settemilaquattrocento e quaranta isole, e per la maggior parte abitate, e che non vi nasce arbore alcuno dal qual non esca un buono e gentil odore, e vi nascono molte specie di diverse maniere, e massime legno aloë; il pevere in grande abbondanza,

bianco e nero. Non si potrebbe dire la valuta dell'oro e alter cose che si truovan in queste isole, ma sono così discoste da terra ferma che con grande diffucoltà e fastidio vi si può navigare; e quando vi vanno le navi di Zaitum o di Quinsai ne conseguiscono grandissima utilità, ma stanno un anno continuo a far il loro viaggio, perché vanno l'inverno e ritornano la state, però ch'hanno solamente venti di due sorti, de' quail uno regna la state e l'altro inverno, di modo che vanno con un vento e ritornano con l'altro. E quasta contrada è molto lontana dall'India. E perché dicemmo che questo mare si chiama Cin, è da sapere che questo è il mare Oceano, ma come noi chiamiamo il mare Anglico e il mare Egeo, così loro dicono il mare Cin e il mare Indo: ma tutti questi nomi si contengono sotto il mare Oceano.

Or lasciaremo di parlar di questo paese e isole, perché sono troppo fuor di strada e io non vi son stato, né quelle signoreggia il gran Can; ma ritorniamo a Zaitum.

「Cap.3 ジパングの偶像の有り様について、住民はいかに人肉を喰らうか。

このジパングおよび近隣の島では、偶像はどれも違ったふうに作られている。あるものは牛の頭を、別のものは豚、犬、羊、その他様々な種類の頭をしている。さらに、頭が一つで顔が二つ、別の頭が三つ、つまりしかるべき箇所の一つに残り二つは両肩の一つずつあったり、また別の手は四本あるものは十本あるものは百本あり、多いものほどより徳があると見なされて、それにより大きな崇敬を捧げる。キリスト教徒が、偶像をどうしてこれほど異なった風に作るのかと尋ねると、「我々の親と祖先がこのように残したのだし、我々も同じように息子と子孫にこのように残すのだ」と答える。これら偶像の作用はこれほど違いがあり、また邪悪で悪魔的なものだから、本書でそれを語るの是不敬で忌まわしいものであろう。しかし少なくとも次のことは知ってもらいたい。すなわち、偶像を崇めるこれらの島の住民は皆、味方でない者や金で身請けできない者を捕まえると、縁者や友人をみな家に招き、その捕虜の男を殺して料理させ、そろって愉快地喰らい、人肉はこの世で見出しうる一番美味しく最高のものだと言うのである。

Cap.4 マンジ地方の真向かいにあるチンという海について

この島のある海はチン海と呼ばれ、マンジの向いにある海という意味であることをご存じ下さい。つまり、かの島の者たちの言葉でマンジはチンと呼ばれる。東にあるこのチン海はとても長く広いから、そこを航海して真実をよく知っている博識の水先案内人や船員たちは、そこには七千四百と四十の島があり、その大部分に人が住んでいると言う。また、良い優れた匂いを発しない木はそこには生えず、様々な種類の香味料、とりわけアロエの木がたくさんでき、胡椒は白いのも黒いのも大量にできるとのことである。これらの島々にある金その他の物の価値は口にすることはできないが、本土から遠く隔たっているので、そこに航海するには多大の困難と苦勞を伴う。サイトゥムあるいはキンサイの船がそこに行くと、ものすごい利益が得られるが、冬に行って夏に帰ってくるから、一年間ずっと旅していることになる。というのも風は二種類しかなく、一つは夏もう一つは冬に吹き、したがって一つの風で往てもう一つで帰ることになるからである。また、この地域はインディアからとても遠い。この海がチンと呼ばれると言ったが、これはオチェアノ海であることを知っていただきたい。しかし、我々がアン

グリア海とかエーゲ海と呼ぶように、彼らはチン海とかインド海と言うのである。しかし、これらの名は全てオチューアノ海のもとに含まれる。

さて、この国と島々については、行路からあまりにも外れており、また私はそこにあったこともないし、それにグラン・カアンが支配しているわけでもないから、これで語るのをおき、ザイトゥムに戻ろう」

この章は、偶像とチン海の二つの記事からなる。インドに向かう前に言い残しておくべきこととして、ジパングの偶像はカタイ・マンジのそれと同じ種類だが、ジパング島があるのはマンジの海であるチン海だからというのが理由である。P とそれに倣う R は、これをその 2 章に分かつ。

偶像崇拜については往路の各地でも中国の諸地においてもいろいろと述べられてあったが、偶像そのものについては様々な種類のが多数あるとされるだけで、その形状や様子が解説されるのは、ch.62「カンピチュウ」（甘州）での巨大な横臥像を除くと、ここが最初で最後である。それによると、「牛や豚や犬・羊その他様々な種類の頭をしたもの、顔や頭が二つ・三つ・四つ、さては手が四本・十本・千本のものまである」。これは「悪魔の技」であり、耳にするのは「キリスト教徒にとってあまりにも悪しきこと」である、したがってこれ以上この書で述べることはしない、と。

これまで、宗教としてよりは驚異の風習として取り上げていた偶像崇拜とその偶像に対して、作者はここで態度を明確にしたと考えてよい。すなわち、東方の宗教はタルタル人の天神を除いて全て偶像崇拜であり、悪魔の技である、と。コトバ（神）による啓示の宗教であるキリスト教の偶像否定は、限りなきものを限りあるもの視えざるものを視えるものにする、つまり神を物質化し視覚化することに対する否定であるが、この場合も、神の似姿としての人間を否定するものと感じられたのであろう。人間の死後の靈魂のありようととも、動物にも靈魂があるとする仏教の考えはキリスト教と相容れなかった。それ以前に、かくも異様にして奇怪な偶像そのものに生理的な嫌悪感を禁じえなかったことが伝わってくる。この点で作者は同一人物で、確かにキリスト教徒でありヨーロッパ人であった。文中、どうして偶像をこれほど様々に作るのかとの問いに対する答え、「我々の祖先がこれを我々に残したのだから我々も子孫にそれを残す」というのは、オドリーコにも用いられている定番の答えであり¹⁹、東方のネストリウス派キリスト教徒の共通見解である。

続いてもう一つこれだけとは、人肉食の習慣が持ち出されるが、前章冒頭の「礼儀よく」と矛盾する。当時の文献で日本にそうした風習を挙げたものは知られないし、他の地での同類の文と変わらないことからして、確かな根拠なしに当てはめたか、単なる噂に基づいたものであろう。これも、おそらく前述の魔法の石の話や、牛や豚や犬の頭をした偶像同様、次のジャワかその近辺の風俗をここに誤って置いた可能性が高い。

次いで周辺の海の説明がある。ジパング島があるのは「チン海」と呼ばれ、「マンジの向かいの海」という意味で、「その島の者の言葉でチンとはマンジのこと」だという。当時もずっと古くからも中国を指して日本で使われていた呼称、震旦（古代インドのチー

ナースターナより）も支那も、西方で使われるチーナ Cina と語源を共有し、秦 Tsin/Qin に由来するという点では正しいが、少なくとも Cin <チン> という音は日本人のそれではない。インドあるいはペルシャの発音である。「その島」 cest ysles と F では複数になっており（Z・R は isola 単数）曖昧であるが、文脈からはジパング島であり、日本のことになるが、この作者がそれを聞き分けられたか疑わしい。もし確かにその島つまりジパング島の者から聞いたのであれば、ポーロは日本人と出会ったことになる。楽しい空想で、泉州であれば決してありえないことではないが、南海からインド洋を含むその地域で広く使われていた語であったがためというほうが当たっているであろう。しかし「チン」の語は、同書では中国はこここで一貫して北はカタイ南はマンジであったから、ここが初出である。また、それらカタイとマンジおよび古代のセレスに代ってその後主流となるこの語が登場する、ヨーロッパでは最初期の文書である。

さらに、この海は「東」にあり、そこに航海する船乗りたちの話によると F「7448」Z・R「7440」の島があり、その全ての島に「アロエの木」（伽羅木）（Z なし）、多種の香辛料、白と黒の胡椒が採れる。金も産し、ザイトンやキンサイの舟はそこに航海すると莫大な利益を上げられる。しかしそこはとても遠く「一年」かかり、冬に吹く風で往き、夏の風で還る。また、インドからもとても遠い、と言う。とするとチン海は、中国沿岸の東海（東シナ海）だけではなく南海（南シナ海）、さらにその南の海とフィリピン・インドネシア・パプアニューギニア（後に香料諸島と呼ばれることになるモルッカ諸島）などの島々も含むようである。モンスーン季節風地帯に属し、冬に吹く北東の風で出帆し、夏に吹く南西の風で帰還する点はそのとおりであった。

そして、チンの海と言ったけれども、実は大洋の一部であることをご存じありたいと念を押して終る。この「大洋」の中には、ジパングのさらに東やチン海のさらに彼方に広大な海のあることを感じさせるが、それが記されるには、マジェランまでさらに200年以上待たねばならなかった。

なお、もう一つの隣国高麗は、先にナヤンの謀反のところ（Ch.80）で「カウリ」として名を挙げられていたにもかかわらず、ジパング遠征でも無視され、ついに単独で取り上げられないまま終る。中国では耳にすることも情報もジパングよりは多かったはずであるが、それが無いのは、ここではチン海には属さず、陸続きでカタイの一部のごとく見なされたためか、あるいは語るべき驚異を見出さなかったのであろうか。それとも、ポーロのノートにはあったが、ルスティケッロにも Z の訳者にも拾われなかったのか。

最後に、「そこ」はルートから逸れるし、F・Z「我々」R「私」は行ったことはないし、グラン・カンの支配下にもないゆえ、これで切り上げて、再びザイトンに戻って本題に取り掛かろう、と言って終わる。そことは、F「その地域と島々」Z・R「その国と島々」とあって明確でないが、チン海の範囲からすればジパング国も含まれる。いずれにしても、ジパングとこの海域は、実際に足跡を印したことはないと明記されている全編で唯一の地である。ジパングの黄金といいチン海の胡椒といい、行って見てきた振りをするにはあまりにも重大な事項だったであろう。三版は基本的によく一致し、小さな語句の異なり以外注目すべきものはない。

4. おわりに

こうして、グラン・カンの国のさらにその東の彼方に、黄金の島ジパングと胡椒の海チン海のあることが伝えられたのだが、それがすぐ反響を呼んだ形跡はない。ジェノヴァから解放されたマルコを訪ねて話を聞いたというパドヴァの自然哲学者ピエトロ・ダーヴァノ(1303年)が関心を持ったのは南半球のことだったし、ヘトゥムの『東方史の華』(1307年)にも、ポーロに続いた14世紀始めのモンテコルヴィーノらフランチェスコ会の修道士たちの書簡にも、長く中国にあった(ca.1322-28)オドリーコの書にも出てこない。ダンテ(『神曲』ca.1300-20)の東方はセレスの名はあるがインドまでだったし、東方に詳しいヴィッラーニの『年代記』(ca.1320-48)にも、そしてなぜか、この旅行記をパロディーに使ったボッカッチョ(『デカメロン』ca.1348-53)にも、大々的に剽窃したマンデヴィル(ca.1360)にさえ登場しない。地図の世界でも、この書から多くを取り入れていることが知られるカタロニア図(1375年)にも描かれない。当時の書でジパングの名が見えるのは、確認されたものとしては、14世紀末のドメニコ・バンディーノ・ダレッツォ Domenico Bandino d'Arezzoの百科事典『記憶すべき世界の源泉』Fos memorabilium universi だけであるという²⁰。地図上にこの島が姿を現すのは、15世紀も中頃のフラ・マウロのそれ(1459年)であった。

圧倒的なグラン・カンの国と比ぶれば、金があるとはいえ一島国であったし、しかも洋上はるかそこに行くには一年もかかるとある。黄金そのものはさして珍しいものではなかったし、本当に屋根や床・窓が金で造られているとは誰も信じなかったであろう。それに、次から始まるインドと比較して、驚異の魅力にも欠けた。この島の存在が確かなものとして西方でも認知され、その探求が始まるには、さらに200年を要したのであった。

註

1. 各テキストの写本および校訂本:
F: MS: Bibliothèque Nationale Centrale de France, Ms.fr.1116. [F]
Marco Polo Il Milione, prima edizione integrale a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo S. Olschki 1928. [Benedetto / Bn]
Z: MS: Archivio Capitulares de Toledo, Ms.49.20.Zelada. [Z]
Marco Polo Milione, redazione latina del manoscritto Z, a cura di Alvaro Barbieri, Parma Ugo Guanda 1998. [Barbieri / Br]
R: Giovanni Battista Ramusio, I viaggi di messer Marco Polo, gentiluomo veneziano, *Navigazioni e Viaggi*, a cura di Marica Milanese, Torino Einaudi 1980, vol. 3 pp.75-120. [Ramusio / Rm]
2. 「マルコ・ポーロ写本—マルコ・ポーロの東方(2)」本誌24-1, 2010, pp.100-06.
3. 石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』岩波書店2005。以下、日本伝からの引用は全て同書。
4. 『宋史』日本伝:「東の奥洲は黄金を産し、西の別島は白銀を出だし、以て貢賦となす」(同上 p.46)。
5. 趙汝适『諸蛮誌』藤善真澄訳注、関西大学出版部1991, pp.242-44.
6. Cf. Foto ①: パリ国立図書館写本 Ms.fr.2810 (FA²) の挿絵 (f.72v)。
7. 大倉隆二『「蒙古襲来絵詞」を読む』海鳥社 2007, p.145.
8. 75v.b 1-76r.b32は、第75葉裏右欄第1行から第76葉表右欄第32行までを示す(aは左欄):Foto ②。原写本に句読点はないが、必要に応じて付す。アクセント記号は付けない。見出しの部分以外に

段落分けはないが、通読の便宜上改行を施した。（以下同）

9. [] 内は校訂本の校訂。（以下同）
10. Foto ③.
11. Cf. Foto ④：パリ国立図書館写本 Ms.fr.2810 (FA 2) の挿絵 (f.71r)。
12. A.C.Moule & Paul Pelliot, *The Description of the World*, vol.I, New York AMS Press 1976, p.362.
13. 「元朝では黒龍江河口一帯の奴児干が重罪人の流謫地と定められていた」[愛宕:(2), 138-9]。
14. *Manuscripts and Printed Editions of Marco Polo's Travels*, by Shinobu Iwamura, The National Diet Library Tokyo 1949. (1485年版の覆刻本)
Marco Polo il Milione, con le postille di Cristoforo Colombo, tr. Da Luigi Giovannini, Roma Paoline 1985. (コロンブス本のイタリア語訳)
MS: Biblioteca Riccardiana di Firenze, Ms.Riccardiano 983+2992 [P⁹].
15. 同上。その序文の和訳は、拙訳「ベネデット『マルコ・ポーロ写本』」(4)《大阪国際女子大学紀要》26-1, 2000, pp.163-64.
16. 前掲 *Marco Polo il Milione*, p.237. 他に「不思議な力の石」の書き込みがある。Cf. 杉本直次郎・伊東隆夫「コロンブスと『東方見聞録』」《東洋学報》38-2, 1955.
17. Foto ⑤.
18. Foto ⑥.
19. Odoricus Portu Naonis, Relatio, *Sinica Franciscana*, Collegium s. Bonaventurae, Quaracchi-Firenze, 1929, vol. 1, pp.413-95. Cf. オドリコ『東洋旅行記』家入敏光訳、光風社1990。
20. Benedetto, 'Introduzione La Tradizione Manoscritta', p.CCXVII; 拙訳「ベネデット『マルコ・ポーロ写本』」(5), pp.171-2.

[illegible]

Foto ① FA²: Ms.fr.2810, f.72v

[illegible][illegible][illegible]

n. Elegance haan fit breuen lichte al
 mers hant ge duncten elue vordet
 cleuue manie alse ouerliefde; manies
 niet yfse liefste liefde manie cecst-
 it paze gel' auer fien geuefchepes
 uue manies niet en al. Genecme
 te uenemem gaur meenee oetel te
 uo lufdes puerne en die plufte
 lomes en nu eufanes y paze gel' nefe
 uenue uolu reuee die uenuehant
 manies gel' fufstet iur mees eque
 it fufstet iur mees lichte al en ali
 fto paze. ane fufte iur deefte lichte
 fagee auus hoes fufstet iur deefte
 nepes it fufstet lichte. ecc. uenue
 puerne nepes gel' auenue
 al uenue elafum iur puerne en fufte
 deefte enue luche elafte fagee
 puerne deefte eufte puerne
 enue uenue gel' uenue nepes
 enue lue lue iur nepes uenue paze
 fufte. Eteefte hant gefufte iur lue
 lue. ane gel' nepes uenue paze
 die fufte amage y uenue gel' me
 puerne uenue uenue fufte uenue
 deefte beate eufte eufte uenue
 elue. en eufte uenue eufte eufte
 eufte uenue oenue uenue eufte
 eufte deefte deefte uenue uenue
 puerne hant uenue uenue uenue
 uenue uenue uenue paze al uenue
 deefte uenue. Eteefte
 manies deefte y deefte
 fufte eufte uenue uenue uenue

Foto ② F: Ms.fr.1116, 75v.b1-76r.b32

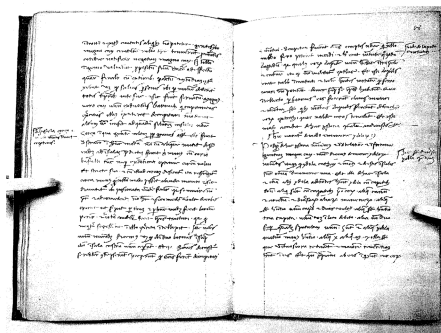


Foto ③ Z: Zelada, 56v.18-58r.10

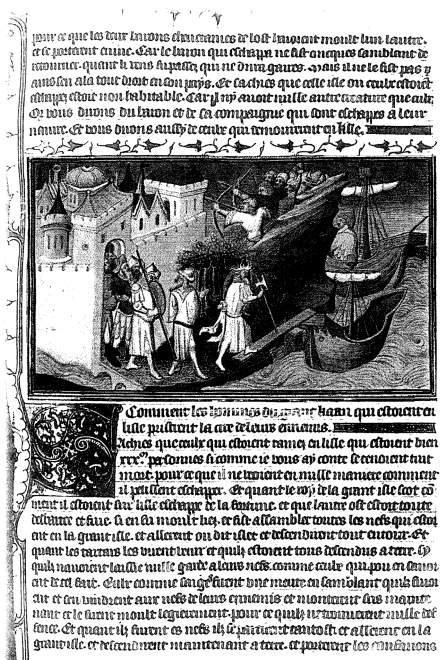


Foto ④ FA²: Ms.fr.2810, f.71r

